

平成23年度校内研究の概要

1 今年度の研究の方向性について

(1) 昨年度の成果と課題について

※H22年度成果と課題 参照

(2) 研究の概要

テーマ「ひびき合う三の丸の子どもたち」  継続

研究課題・・・切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成  継続

◎手だて・・・子どもの「切実な問題」を見とった単元構想と授業づくり  「単元構想」を追加し継続

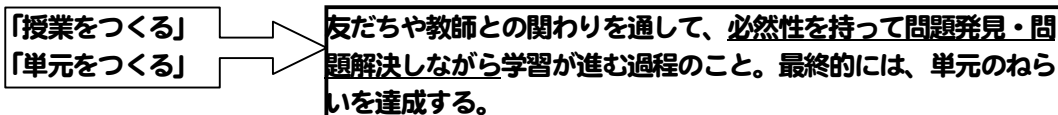
ブロックテーマ

低学年	中学年	高学年	個学
感じる心、 素直に表現する自分 ・人の言動に何かを感じる姿 ・自分の思いや、他者からの刺激に対し、素直に表現する姿	追究する力、 仲間と支え合う自分 ・自分の問題をとことん追究する姿 ・仲間と協働して追究する姿	仲間への共感、 自立する自分 ・仲間に共感しつつ、自分の思いも大切にする姿 ・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿	感じる心、 気持ちを伝える自分

①研究課題と手だて設定の理由

子どもの知的好奇心をもとに単元をつくることは、昨年度の研究である程度共通理解し実践できたと考えている。しかし、子どもの知的好奇心が、必然性を持った問題となったかという点で疑問が残る。下に示す「授業をつくる」「単元をつくる」定義の中の、「必然性を持って問題発見・問題解決する」部分がやはり欠けているのではないか。そのためには、まず教師が単元構想（0次案）をしっかりとたてることが重要だと考える。子どもたちが学習のねらいに向けて、教師、子ども、教材がお互いに関わり合う中で、どのような思考過程をたどり、どこで子どもたちが切実な問題意識を持つ可能性があるのかを、教師自身が考える必要があるということだ。もちろん、実際に学習が始まると構想通りに行かないことが出てくる。その過程での子どもの思考をみとり、当初予想された展開や課題とは異なることはあり得る。その時の子どもの切実な問題意識とは何かを教師が見とり、子どもと共に学習をつくっていく過程で、単なる「関わり合い」ではなく「ひびき合い」の姿が見られると考えている。

「知的好奇心」と「子ども同士が関わり合う」ことは大前提とし、教師が子どもの切実な問題とは何かを見とって授業をつくることを、引き続き手だてとしたい。



②研究仮説

子どもの切実な問題を見とり授業をつくることで、ひびき合う姿が見られる

③研究方法（具体的な方法は後述）

一人年一回研究授業（国語、社会、算数、理科、生活、生活単元学習）、レポート報告会、子どもの意識実態調査

2 具体的な研究方法

(1) 単元構想（まずは授業研究で行う単元で）

①ねらいや子どもの実態、文化的可能性等を考えて0次案をつくる。

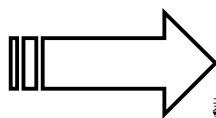
子どもたちが学習のねらいに向けて、教師、子ども、教材がお互いに関わり合う中で、どのような思考過程をたどり、どこで子どもたちが切実な問題意識を持つ可能性があるのかを、考えること。もちろん、実際に学習が始まると構想通りに行かないことが出てくる。その過程での子どもの思考をみとり、当初予想された展開や課題とは異なることはあり得る。

②単元終了後の扱い

当初の構想がどのように変化し、構築されていったのかがわかるように記録として残す。

(2) 授業のありかた (H20年度研究概要参照、これより継続のため、)

- ①教師の与えた教材が知的好奇心を喚起し、徐々に子どものものとなる学習
- ②子どもの知的好奇心がスタートかつゴールの学習
- ③子どもの知的好奇心が発展していく学習



どれがいいということではない。また、子どもから出たものでなければならないということでもない。子どもの切実な問題意識を教師がどう見とり授業をつくるかが大切。

教師・子ども・地域の個性を生かしてほしい。

(3) 授業形態

様々な場面で、**その時に必然性を感じられるような授業形態**をとる。ただし、前提は、一人ひとりが自分の考えを持っていること。

(例) クラス全体 グループ ペア

低学年では様々な形態を経験、中学年ではそれらのよさを実感、高学年では形態を自分自身で選択できるようになると一番いいが、まだその段階ではないと思われる。まずは、様々な関わり合いの場面を通して、子どもたちが経験と実感を持てるように教師が意識していくとよいのではないかと考える。

(4) 授業研究

①研究する教科、条件

- ・国語、社会、算数、理科、生活、生活単元学習。その他の教科は実践レポート報告会で。
- ・導入(単元1時間目)はなし→子どもが自分たちの切実な問題を解決していこうとする場面を見たい。
※ただし、個学は実態に応じて、好奇心を喚起する場面や導入でもよい。
- ・活動のみの研究授業にはしない→切実な問題を検証するための活動なら部分的に入っていてもよい。
- ・検討は、ブロックを中心にしっかりと行う。

②研究授業を行う時の留意点

- その一時間だけでなく、単元を通して、教師が子どもの切実な問題をどうとらえ、子どもたちは友だちや教師とどのように関わり合いながら、単元目標に達していくのかが大切。**子どもが切実な問題を解決する場面、または、何がみんなにとって切実となり得るのかを迷うような場면을研究授業として行う。**
- 始めにたてた単元指導計画通りにいかななくてもよい。あくまでもそれは計画。子どもたちの持った課題や思考の流れによっては、途中で変更もあり得る。
- 指導案に、教師の考えと、現時点または予想される子どもの願いや考えを明記する。

③授業研究の視点

- 本時をもとに、授業者の願う授業を行うことができたかを考えていく。
- 本時の学習問題は適切であったか(子どもにとって切実な問題であったか)
- ひびき合いが見られたかどうか。
 - ・見られなかったとしたら、どこに問題があったのか。
 - ・見られたとしたら、どこがよかったのか。
- 授業者の願いと子どもの思考から、今後の授業をどのように展開していくことがよいのか。
- 子どもの言動をよく観察し、発言、反応、活動、表現物からひびき合いについて話し合えるように。
→本時をもとに、これからの授業をどのように展開するとよいか、という発展的な協議にしたい。
- 協議方法は、基本的に昨年通り。その需要での成果と課題をまとめ、可視化する。

④研究会の持ち方

- 今年度も、早稲田大学教授 小林宏己先生にご指導いただく。
- 全体研究会、ブロック研究会、選択研究会とする。(日程は後日提案)

⑤指導案 + 単元構想

(5) 実践レポート報告会(年4回)

- ・6月…学級経営案の紹介
- ・8月…学級経営の経過や変更点報告。
- ・12月…冬休み前までに知的好奇心に関する授業実践レポート(A4一枚)
- ・2月…学級経営報告